



NHKの番組「ラジオ深夜便」において、社会福祉法人進和学園理事長の出縄雅之のインタビューが、下記の通り放送されました。

NHKの人気番組において、私共の取り組みが全国放送されましたことは、誠に光栄なことであり嬉しく思います。

このような機会に恵まれましたのも、40年間に亘り貴重な仕事をご発注頂いている本田技研工業（株）様をはじめ、地域・社会・行政・企業の多くの皆様のご支援ご指導の賜と、心より感謝申し上げる次第です。



NHK「ラジオ深夜便」の中村ディレクターのインタビューを受ける出縄雅之理事長
～「おぼたき進和」にて～

記

- ・日 時 : 2014年 5月 7日 (水) AM4:00 台
- ・番 組 : 「ラジオ深夜便／明日へのことば」 (NHKラジオ第1放送 594KHz)
- ・出 演 : 社会福祉法人進和学園 理事長 出縄雅之
- ・テーマ : 知的障害者に働く喜びと自立を



<要旨>

1958（昭和33）年、自宅を開放して40名の知的障害児のための施設としてスタートしてから56年、子供から大人への成長に伴い「働く喜び」を追求して来た道程を振り返りました。障害というハンデを乗り越え、ホンダ車部品の組立加工を中心に、それ以外にも様々な仕事に挑戦する福祉的就労現場の声をお伝えしました。

全国平均を大きく上回る工賃レベルを継続して来た背景として、ホンダ様の深いご理解ご支援による貴重な仕事のご提供、機械メーカーOB（ボランティア）の献身的なご指導、「治工具」を駆使した品質保証・工程管理、知的障害者の特性を活かした役割分担、そして、研進という窓口会社を設け企業的な運営を導入していること等を紹介。多角化への取り組みとして製パン・クッキー、いのちの森づくり、地元スーパーでの施設外就労、農産物加工等に注力している現状にも触れました。

企業における直接雇用に加えて、福祉的就労の底上げが必要であること、それを後押しする制度・仕組みの整備が望まれること、働ける意思と能力のある方は、「働く喜び」「働く誇り」を大切に自立を目指すことが「人権」を尊重することに繋がるとの想いを披露しました。

知的障害者に働く喜びと自立を

(本稿は、ラジオでの放送内容を文字に起こして編集したものです)



NHK 中村俊男ディレクター：中村 D

社会福祉法人進和学園 出縄雅之理事長：出縄 R

(中村 D) 神奈川県平塚市にある社会福祉法人進和学園が運営する自動車部品組立工場にきています。ここでは、およそ120名の知的障害者の方が自動車部品の組立を中心に行っています。工場はとてもきれいに整頓されていて、部品ごとのラインそれぞれ10名程度の方が一生懸命、組立作業をしています。働いている方にお話を伺いたいと思います。

お工作中、すいません。今、どんなものをお作りになっているんですか。

(作業員・知的障害者) こっちは、もう車の部品作ったりしてます。

(中村 D) 仕事をしていて、どうですか。楽しいですか。

(作業員・知的障害者) みんな楽しいです。

(中村 D) もう長く働いていらっしゃるんですか。

(作業員・知的障害者) もう5年になります。

(中村 D) 難しいですか。

(作業員・知的障害者) 難しくはないですけど、みんなと仲良くやるのは楽しいです。

(中村 D) やっぱり働けるっていうことは、嬉しいですか。

(作業員・知的障害者) はい、嬉しいです。



(中村 D) 今日は、知的障害者に働く場、働く喜び、そして自立の機会を40年間創り続けている進和学園の取り組みを伺いたいと思います。進和学園の理事長、出縄雅之さんにお話を伺います。

今、自動車部品をやられている「しんわろネッサンス」にお伺いし、見学させて頂いたんですが、進和学園ではどの位の知的障害者の方が働いていらっしゃるんですか。

(出縄 R) 進和学園は、56年前に開設致しました。当初は児童施設でございましたが、利用者の方の成長と共に大人の施設に転換しました。開設当初からの目標に、働く喜びということ掲げておりました。作業を通じて社会に役立つということが一番分かり易いし、ご本人達も一番理解できる。そのような考え方で運営して参りまして、現在、関わり合っている人達は約500名、生活介護、入所、通所、両方ございます。あとは就労支援のA型(雇用型)、B型(非雇用型)、そして就労移行支援事業です。就労系施設の人達が合計約150名、生活介護が合計約350人ですが、そのう

ちの約300名位が何らかの形で作業に携わって、それから最重度の方は作業というよりは機能訓練という形でやっております。就労の部門が約150名でございますが、先程見て頂いた「しんわ
ルネッサンス」を中心に展開しているところです。

就労系施設は、昭和49（1974）年、ちょうど40年前ですが、私共の前の理事長、出縄明が
創設し、その長兄の出縄光貴がホンダに勤務していたというご縁で、創始者の本田宗一郎さんのご
支援を得ることができまして、40年前からホンダさんの二輪車・自動車の小組立を中心に組み
んできたということでございます。



開園式で挨拶する出縄明



開園当時の進和学園児童部



ホンダマン時代の出縄光貴

昭和33（1958）年 自宅を開放して知的障害児40名の施設として進和学園はスタートしました！

（中村D） 自動車部品の組立以外にも、それこそ陶芸だとか、パンを作ったりとか、いろんなプロジェ
クトというか、事業をやってらっしゃいますが、代表的なものとしてはどのようなものがあるん
でしょうか。

（出縄R） リーマンショック以来、ホンダさんの部品が減少してきました。ピンチはチャンスという考
え方もありまして、余力を他の部門に振り分けて、何とか多角化しようと思いました。それで、今は
パン・クッキー等の製造とか、昔からやってました陶芸ですとかシイタケ栽培、農園芸などです。
それから、この8年ほどは、「いのちの森づくり」プロジェクトと称していますが、ドングリの実を
拾って、ポット苗を作って、その土地に合った森づくりを行っています。その他、地元のスーパ
ーでバックヤード等の作業、それから環境整備。毎日10名程のグループが施設外の仕事で活動をし
ています。それから、市内の老人ホーム等の清掃作業、これも毎日、グループで活動をしています。



製パン・クッキー



いのちの森づくり



地元スーパー施設外就労

（中村D） そういう方々に働いてもらう時に、どのような形で仕事に就いてもらうのですか。

（出縄R） まず、ご本人の希望。どんな職種をやりたいか。それから、ご本人の適性を職員の方で判断
致します。その辺の協議の中で、就いて行く作業を決めて参ります。ただ、ご本人（知的障害者）
の特性としては、非常に継続性が高い、あるいは集中力が高いということが言えると思います。そ
れを加味して、どういう形で職員サイドがサポートできるか。その辺りも含めて決めて参ります。

（中村D） 仕事をするという意味では、一般社会では「雇用」というような形になりますけども、こ
ういう施設で働く場合、雇成型と非雇成型という2つの種類があるとお聞きしたんですが。

(出縄 R) 先程ご覧頂いた自動車部品の組立部門では、雇成型、就労継続支援 A 型と言いますが、それが 20 名。あとは、非雇成型です。「福祉的就労」というような言い方をしている訳ですが、その人達は就労継続支援 B 型と呼ばれ、その人達が多いですね。

(中村 D) 具体的に言うと、雇成型と非雇成型というのどういう違いがあるのですか。

(出縄 R) 雇成型は文字通り雇用関係が発生していて、私共法人の職員として全て処遇します。当然、賃金も最低賃金はできるだけ守って行く。非雇成型は、いわゆる福祉施設の利用者ということでございますので、携わった作業の収益を工賃として配分をして行く。雇用関係はございません。

(中村 D) 雇成型では、賃金は、1 カ月フルタイムで働くと、どの位になるのでしょうか。

(出縄 R) いわゆる雇成型の場合には、最低賃金法のレベルです。ベテランになれば若干の割増とかがあり、あと、期末手当等も多くはないですけども、確保するようにしています。

(中村 D) 例えば雇成型の方だと、大体 1 カ月、どの位の給料というか、工賃が払われるのですか。

(出縄 R) 「しんわろネッサンス」では、15~16 万というところですよ。問題は、「福祉的就労」の方だと思います。全国的な平均値は 1 カ月に 1 万 3,000 円~1 万 5,000 円程度です。いかにも少ない。私共の場合ですと、自動車部品に携わってる人達は、平均で 4 万 4,000 円位になっていますし、パンや森づくり等でも 2 万円を超えるレベルを確保しています。もっと沢山働く場が確保できれば良いと思うんですけども。

(中村 D) しかし、今、大体 1 万 3,000 円~1 万 5,000 円というふうなお話をお聞きすると、進和学園はそれを遥かに超える労働対価を支払うことができている訳ですけど、それは何か特別な仕組みがあるのですか。

(出縄 R) 仕組みというか、1 つは本田技研さんのご支援を得られていること。その仕事がベースになっており、それをベースにして多角化に取り組むことができているということでしょうね。

それから、もう 1 つは、先程申し上げたような障害特性に合った仕事であればかなりの仕事量をこなせる。B 型といえども、普通の方に比べて 3 分の 1 の能力があれば、外国では労働者と認められる。日本ではそうではない訳です。その人達が、先程来の 1 万 3,000 円~1 万 5,000 円のレベル。いかにも低過ぎます。

それを補うのは、やはり周りというか、場面設定というか、重要な要素は、彼らの能力を補うことで、1 つは治工具。組立をするために間違っていないかどうかを確認する器具だとか、そういうことが簡単にできるようにする。この治工具開発が一つの決め手になると思います。

幸い、私共の場合には、ボランティアで企業の経験がある O B の方達はその治工具開発に取り組んで頂いたのです。非常にユニークな、専門家から見られても恥ずかしくない

ような治工具開発ができています。もう 1 つは、福祉施設だけではなかなか及ばない物流ですとか、配送コスト、あるいは色々なリスクを負担する部門を、「研進」という管理会社を設けて専門に当たらせています。その辺が、何とか今のレベルを維持できている原点ではないかと思っています。

(中村 D) 何かをやる時に福祉施設が一から十まで全部やるのではなくて、営業とか、見積もりを作ったりとか、あるいは納品したりとか、物流や仕入れもあるでしょうけど、そういうものを管理する中間の会社をこちらの進和学園とリンクさせながらやっているということが、やはり、うまくいっている秘密なんじゃないかな。



専門知識・スキルを活かして治工具を開発



進和学園の営業窓口会社「研進」は、本田技研様の「研」と進和学園の「進」を合わせて命名されました！

(出縄 R) 福祉施設では、営業をすとかいうことは論外ということでございました。しかし、そういう部門がなければやっていけなくなることが分かっていたから、お願いをして今の形になった。ある意味では、福祉施設の人間だけではできない分野がクリアできているのだろうと思います。

(中村 D) そうすると、ちょっとお話を伺ったところだと、いわゆる福祉施設みたいな形で、工賃だけもらおうという形だと、それなりの評価というか、金額がもらえない。間に研進という会社を通すことによって、材料を自分達で仕入れて、組立てて、納品するという、一つの事業体としての流れを作り、きちっとした工賃を確保できるというようなこともあるのでしょうか。

(出縄 R) はい。おっしゃる通りだと思います。

(中村 D) 自動車部品だけじゃなくて、パンとか、色々な別の事業でも、やはり、そういう形で、うまく運営できるということでやられている訳ですか。

(出縄 R) そうですね。特に「いのちの森づくり」等については、発端はNHK深夜番組の「こころの時代」。横浜国立大学名誉教授の宮脇昭先生が出演されて、それを前理事長が聞いて、感銘して、「しんわろネッサンス」という施設を作った時に、その植樹のご指導をお願いしたんです。それが宮脇先生の応援もあって、一つのプロジェクトとして動いているのですが、その指導は研進が今もって担っています。



宮脇昭先生による植樹指導

その他、パンの一部ですけども、売り先、クッキーも含めてですね。それから、先程お話ししました、地元スーパーさんへの対応、それも研進がリードして関わっています。我々、福祉部門だけの発想ではできない部分というのがありますので、気が付かない、あるいは全然連想しないというか、そういう部門の役目ができているのだろうと思います。

(中村 D) 福祉の事業の場合、働く場所を創ってあげるだけでいいよね、給料なんか二の次だよね・・みたいな考えが、今まで大きかったと思うのですが、それじゃ駄目だということなのでしょうね。

(出縄 R) まずは働ける場があること。40年来、私も一緒に働いてきたのですが、働くというのは、働く喜びを満喫して、誇りを持つということですね。特に、工賃配分として幾ばくかの収入を得るということは、自信に繋がるといいますかね。人間としての誇りとか、その辺に関連するのだろうと思います。ご家族も含めて、ご本人が一生懸命働いている姿というのは大変貴重に思っています。

(中村 D) そもそもですけども、進和学園さんが自動車の部品を作るようになったきっかけというのは何かあったのですか。

(出縄 R) きっかけは、やはり、利用者の成長で、みんな働きたいって言うんです。当時は日本が右肩上がりの好景気の中でしたから、働くのが当然、当たり前。大人になればそうなるというふうなこ

とが、障害者といえども、私共も同じだと思のです。その中で、できるだけことはやったつもりですけども、例えば公園の清掃を市から請負ったり、あるいは学校のトイレの清掃もグループを作ってやりましたが、十分な収入が得られない。その辺の姿を見て、冒頭申し上げたように、一番上の兄、光貴が、ホンダさんをお願いしてみようという話になった訳です。

(中村 D) その一番上のお兄さんは、ホンダとは何かご縁があったのですか。

(出縄 R) はい。ホンダの社員でございました。もうその時点では退職してはいたけれども、先程申し上げたように、本田宗一郎様に目をかけて頂いたお陰だと思います。

(中村 D) 始めるといっても、ものづくり、特に自動車部品とかオートバイの部品というのは精密で、品質もあるでしょうから、軌道に乗るまでというのは大変だったんじゃないですか。



昭和49(1974)年 本田技研工業(株)様の親身なるご支援によりホンダ車部品授産事業がスタート！

(出縄 R) まず第一に、本田技研さんの社員に泊まり込み頂きまして、1カ月、2カ月、直接ご指導を頂きました。その間に私共の幹部職員を実習に行かせて頂いて、速成の技術習得をさせて頂きました。そういう特別なご支援がございました。



ホンダ車部品の組立加工に励む！ 昭和53(1978)年当時の「進和職業センター」

(中村 D) いわゆる品質の評価をする国際基準であるISO9001ですか。

「しんわルネッサンス」はこの認証を取っているというお話を伺ったんですが。

(出縄 R) これも先程申し上げた、ボランティアの皆さんのご援助、ご指導。いわゆる企業OBでございますから、技術屋さんですよね、皆さんの応援があつて取れました。職員も頑張ったと思えますけれども、本当に多くの皆さんのお陰で現在があると思っています。

(中村 D) 30何カ月間不良品ゼロという記録を更新していると聞いたんですけど。

(出縄 R) やはり先程申し上げた治工具の存在、それから本人の集中的に取り組むことができるという特性、その辺にあると思んです。できるだけ頑張りたいと思っています。

(中村 D) 働いていらっしゃる方も、職員の方も、本当に小まめに気を遣って、勉強しながら歩んでいるという感じなんじゃないかな。

(出縄 R) そうですね。ですから、職員と利用者という関係だけではなくる訳です。働くということは一体にならないとできないですから。働くということは大変面白いことと思っています。

(中村 D) 工業製品みたいな部品を組み立てるといふか作っているのは、全国的にもやはり珍しいんでしょうか。

(出縄 R) 今はそんなことないと思いますが、40年前は珍しかったでしょうね。一企業とタイアップするということが許されない時代ですから。何かあった時にどうするという、先の心配ばかりをしている時代でしたから。ただ、我々それを乗り切って、40年やってくることができた。それは本当に僥倖というか、有難いことですね。それなりの努力は致しましたけれども、ただ、それがなければ全く今の姿はないと思います。

(中村 D) 障害者の働く場という部分では、時代の流れの中で、少しずつでしょうけども、改良されているという声がある一方で、昨年ですか、障害者法定雇用率というのが1.8から2%に引き上げられたと。けども、法定雇用率を守っているというか、維持している企業は全体の40%というような中で、なかなか目に見えない状況ですけど、今の日本の障害者雇用についての現状をどう見ていらっしゃいますか。

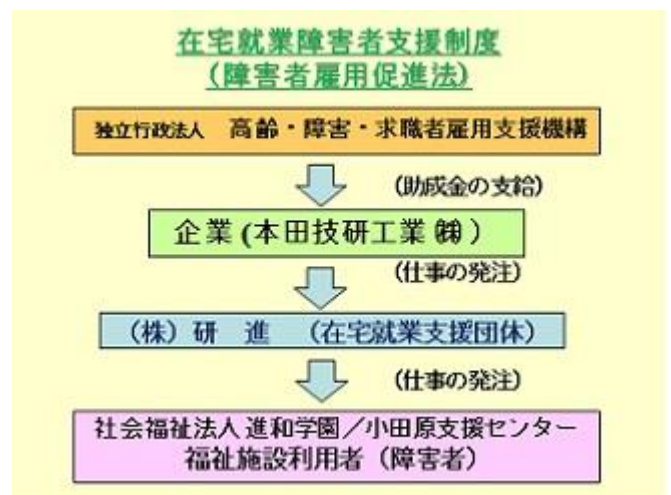
(出縄 R) 色々な形で直接雇って頂くことが一番早いと思います。ですけれども、障害という問題がある訳ですから、不可能というか、可能性は極めて低い。そうであれば、仕事を出して頂いた企業の方達に、その雇用率も含めてその貢献が報われるような形での制度、そういうものが望まれると思います。雇用率だけでは、救われる障害者というのはやはり一部。そのレベル以下の人達はやはり何もすることがないという状況から脱しませんので、社会そのものがその辺に思いを致して頂いて、障害者に働く場を与えて頂くことができれば、やはり変わって行くでしょうし、それから制度そのものも、そういうことを応援して行く制度になって行かないといけないと思っています。

(中村 D) その一つの例として、いわゆる「在宅就業障害者支援制度」ですか。

(出縄 R) 在宅就業支援団体という制度ですね。

(中村 D) これは、例えば企業が進和学園に仮に事業みたいなものを委託すると、その発注した会社の、いわゆる障害者雇用率に反映されるというような、そういう制度と考えて良いですか。

(出縄 R) 今は、法定雇用率には反映されないんです。利用者が受け取った工賃、その105万円以上の部分を約6%。その発注元企業に還元をするという報奨金制度ですから、それでは弱い。雇用率に直接反映するという形が望ましいと思います。



(中村 D) 先進国と比較すると、今の日本の障害者の就労ということに関しては、どんなふうには見えていらっしゃいますか。

(出縄 R) 考え方として、賃金として見るか、あるいは所得ということで見ると。日本の場合には所得という考え方だろうと思うんです。ですから、働くことで得た賃金というよりは、障害者の場合には障害基礎年金制度がありますので、それにプラスして本人達が働く。ただ、本来的に言えば、働いたから賃金は得るので、働かなくても得られる年金というのは、本当はちょっと違うような気がします。大変良い制度で、障害者が生きて行く上ではとても大事なことですけれども、ただ、本人の意欲だとか喜びとか満足度だとか、そういう点から言えば、年金というのはちょっと違うと。やはり働いた者はそれなりの成果は得られるという部分が若干、制度的にも残っていないと、やる気が起きないというか、充足感がないというか、私なりにそのような思いでいます。

(中村 D) 働きたくても働けないという重度の方と、働く能力はあるけど働く機会がないから働けない

という方とは、やっぱり違いますよね。やっぱり働くという能力もありながら、働く機会、働く場がないという、その部分を広げて行くというふうなことが、社会の理解も含めて、企業の理解も含めて、その辺が大切だというふうに私なんかは思うんですが。

(出縄 R) おっしゃる通りだと思います。やはり働きたいというのにチャンスが与えられない、機会がないということは、大げさに言えば、もう人権問題だと思います。ご理解を得て、そういうチャンスを少しでも増やして頂ければ有難いと思っています。

(中村 D) ここまで自動車部品を手掛けて40年ですね。この後、進和学園は、知的障害者に仕事の場を与えて、働く喜びを感じてもらい、自立できるだけの賃金を払って行けるということで考えると、将来的に、どのようなビジョンというか、理事長は夢を抱いていらっしゃるのでしょうか。

(出縄 R) 沢山ある訳ですけれども、一つは、地域の社会と協調して何かできないかと。この辺、農村地帯でございますので、農産物の加工等を手がけてみたい。これは当面の目標です。今、作業場を作っている最中ですが、そんなことですか。

(中村 D) 先日お伺いした時に、僕は、平塚のミカンのジュースを練り込んだミカンパンっていうのを作った試作品を食べて下さいと言われて頂いたんですけど、びっくりするほどミカンの味がして、いろんなパン屋さんがいろんなパンを作ってるけど、こんなパン食べたことがないくらい、美味しかった。やっぱりそういうアイデアみたいなものを広げていくということが、学園としての事業としても夢を膨らませて行くことも大切なんでしょうね。

(出縄 R) そうですね。そのミカンパンについても、きっかけは、ミカン農家の、製品にならないミカンの選別に行ったことなんです。商品化できない部分を廃棄しなきゃならん。その辺が何とかならんかということで、農業技術センターの技師の皆さんとか、いろんな食品のコーディネーターをされる方々とか、そういう人達が皆さん、ご協力下さってのミカンパンなんです。ですから、職員だけではやはり展開が難しい。いろんな方のご理解とご協力が不可欠だと思います。そういう訳で、いろんな方に本当にお世話になって、ミカンパンなり、あるいは何でもそうなんですけれども、出来上がって行くのかなと思っています。



「いのちの森づくり」等も、環境問題も含めて進めて行きたいし、それから、ポット苗作りならどこの施設でもできるんです。今、他の施設にも参加をお願いしている最中なんです。そのグループを「どんぐりグループ」と称し、福祉施設間のネットワークを「どんぐりブラザーズ」と称して展開できれば、我々だけではなくて、いろんなところでそういうものが芽吹いて行くだろうと思っています。

(中村 D) 先日、ちょっとテレビの番組で、元阪神タイガースの選手だった方が癌にかかれて手術をされたらしいんですけど、その方が、私はもう死ぬ訳にはいかないんだと。一日も長く生きなきゃいけないんだと。なぜかという、息子が一人いると。ダウン症だと。その彼を面倒見るために一日も長く生きなきゃいけないというようなことをおっしゃってたんです。障害を持った方の親御さんっていうのは、子供が一人になった時にどう自分一人でというか、自立して生きて行くことができ

るのかって、本当に心配されてる方が沢山いらっしゃると思うんですけども。

(出縄 R) そうですね。どの親御さんも、この子残して死ぬ訳にはいかん、死ねないというふうにおっしゃる訳ですけども、そういう思いを親御さんがしてらっしゃる間は、本当の意味での共存共栄の社会ではないのだと思うんです。幾つになっても親御さんは子供のことが心配ですよ。それはいいとして、ただ、それが心残りです。先程の阪神の選手の方みたいな思いをさせては社会としては良くないのではないかと。

(中村 D) 先程お会いした方は、もう50年、こちらでお世話になって、もうだんだん高齢となり、本当に進和学園さんは最後の最後までそういう方のお世話をしていかなきゃいけないということで、時代の流れの中で、役割というのもどんどん大きくなって行く気がするんですけども。

(出縄 R) 40年前に本格的に作業に取り組んで、一緒に働いていた仲間が今、晩年を迎えている訳です。最後の一生を支援できる施設が必要だと思えます。この施設（はばたき進和～高齢障害者介護施設）も2月に、漸くその思いが叶って、建替ができたんですが、もっともっと社会の皆さんにもご協力を頂く環境ができなけりゃいけないと思えます。

働くことは良いことだと一筋に信じてやってきた訳ですけども、この3月に、30年間一緒に作業をしてきた、57歳になる方が亡くなりました。その葬儀の席に参りました。ホンダさんと同じ白い作業服を着て働いていた訳ですけども、その遺影が、その時の制服、制帽だったんです。それを見て大変胸が詰まる思いをしましたが、ご本人の誇りというか、一番良い時代、ご家族にとっても一番安心の時代の表れかなという気がして、やはり就労支援をしてきて良かった、何か確認ができたような気が致しまして、頑張らなきゃいかんという思いを強くしました。

(中村 D) その3月にお亡くなりになった方は、自動車部品を長年作って、携わっていらっしやった。その方がお亡くなりになったご遺影に、その働いていた時の制服と制帽を着た姿がご遺影になっていたということですね。

(出縄 R) ご本人が正装した写真だとか何かが沢山ある人なんです、あえてご家族が選ばれたのがその作業現場の写真だった。それは大変、私としては有難いし、それから、何というんですかね。今までのことが少し良かったのかなと思う瞬間でした。

(中村 D) 一口に、障害者の方に働く場を、働く喜びを、そして自立できる機会をというふうに、言葉の上で言うのは簡単ですけど、実際の現場というのは本当に大変なご苦労の連続なんじゃないかな。

(出縄 R) 我々職員は好きでやらせて頂いている訳ですから、当然、ある程度の苦労は当たり前のことだと思っていますが、ただ、今の若い人達もよく頑張ってくれていると思えます。本当に優しく接しようという努力は大したものだというふうに、私の目から見ても思えます。

(中村 D) 進和学園がスタートした時というのは、障害者はなるべく家に閉じこもって、表に出ないでというような世の中の考え方があったと思うんですけど、もっともっと社会に・・・というような流れに変わった。働ける人も徐々に生まれているということですが、今後、そういう方々が本当に自由にというか、澆刺と社会の中に出て生きて行けるということが実現すればいいと思うんですけど、理事長はどんなふうに考えていらっしやいますか。

(出縄 R) 障害者の方達が、世の中で特別であってはいけないと思うんです。特別に優しくして頂く必要はない。ただ、世の中の一人として認めて頂く。もうそれだけに尽きると思えます。

[7]